

# 内村鑑三と今井館

— 本駒込の地に想いをつなぐ



## もくじ

今井館写真

2

## 移転開館に寄せて

ご挨拶

理事長

加納孝代

9

新今井館に託する思い

前理事長

加納孝代

10

開館に至るまで

西永 頌

西永 頌

12

内村鑑三と今井館（開館記念講演）

大山綱夫

26

主の山に備えあり

前監事

山本 浩

36

## 本駒込今井館の紹介

施設紹介と「聖書講堂」

荒井克浩

40

閲覧室と書庫

加納孝代

46

〔今井館見取図〕

藤田 豊

48

資料関係（新図書システム）

廣瀬治基

52

今井館テラス六義園

上原和幸

54

ITシステム

上原和幸

54

「貸室」 聖書講堂と集会室  
『今井館ニュース』

三上由美子  
矢田部千佳子

57 55

百周年記念『今井館の歩み』より

今井館の百年を振り返って

津上毅一

60

北越の今井館

新井明

64

今井館―始めと経過―

高木謙次

68

今井樟太郎君追悼演説

内村鑑三

71

今井館聖書講堂に関する報告

斎藤宗次郎

77

内村鑑三紹介・将来へ

内村鑑三抄伝

小林孝吉

82

新今井館を「神の国」の証し場所として

安彦忠彦

96

移転募金について

西永頌

97

編集後記

川中子義勝

102

移転・開館に寄せて



## ご挨拶

今井館教友会理事長 加納孝代

大阪の香料商であった今井樟太郎によって内村鑑三に贈られた建物を私たちは「今井館」と呼びならわしています。

今井館は最初は一九〇七（明治四〇）年に内村鑑三が新宿区の角筈から柏木に転居した際、小さな集会室兼地方の教友の宿泊所として敷地内に建てられた日本家屋でした。資金は今井樟太郎の未亡人信子によって献じられたものです。一九一四（大正四）年には約百名が入る聖書講堂へと改築されました。その際も今井信子夫人による多額の寄付がありました。内村没後その土地が区画整理の対象となり、聖書講堂は一九三六（昭和十一）年に目黒区中根に移転しました。それから八十五年が経過、さらに文京区の本駒込に移転することになりました。移転のたびに志を同じくする多くの人々からの献金がありました。今回の目黒区から文京区への移転に際しても実に広範囲の方々から寄付が寄せられました。どんな言葉をもってしてもそのことへの感謝の念を表し尽くすことはできません。

建物自体は以上のようにいくつかの変遷を経ています。が、「いまいかん」という言葉は関係者の間ではごく自然に口をついて出てくる言葉となっており。そこに込められた意味、今風の表現でいえばレガシー、ヘリテージとは何でしょうか。私が思うのは二つのことです。一つはこの今井館で、キリスト者が真実の信仰と、信仰の真理を求め続け、自分の見出したことを勇気をもって堂々と世の中に向かって語り続けてきたということ。もうひとつはそのような先達に励まされた多くのキリスト者が、それぞれの置かれた境遇で同じように信仰による真理を求め続ける歩みに加わり、その人生を信仰の証として蓄積しつつある、ということ。です。

この本駒込の今井館では二〇二二年一月に開館記念式を行う予定でした。しかし新型コロナウイルス感染症拡

大の中、それができなくなりました。そこでそれに代わるものとしてこの記念誌を作ることが提案され、ここにその完成を見ることができました。振り返ってみればそれも神の導きであつたように思われますが、しかし神のみ心はこれであるとは人間である私どもには分かりません。ただひとつ確信できるのは、神がこの世を「良かれ」と思つて創られたということです。その神のみ業に加わりたいと、神の呼びかけに耳を澄ましながら、神の導きを祈りつつ、謙虚に歩んでゆきたいと思う方々にとつて、この今井館がこれからも大切な拠り所となることを願つてやみません。

## 新今井館に託する思い

### 加納孝代

二〇二二年の春、文京区本駒込の六義園のそばに、今井館が目黒区中根から新築という形で移転し、開館しました。理事の一人として喜びと共に今井館の持つ使命の重さに緊張感を覚えます。

私が今井館に関わるようになったのは二〇一七年の秋でした。初めて出席した会議の席で、中根の今井館は資金難から閉じざるを得ないかもしれない、そうなれば今井館の蔵書を引き取ってくれそうなどころを探すしかない、といったことを聞きました。今井館では当時、今井館の歴史と書籍・雑誌や、内村鑑三をはじめとする無教会の諸先達、諸先輩の方々を愛する十数人のボランティア・スタッフが働いておられました。今井館の蔵書類がその人々の手から離れたらどうなってしまうのだろうと不安な気持ちになりました。

私以上にそうしたことを憂えた方々が数多くおられたおかげで、今井館はその後、幾多の課題を克服して新築、移転、開館の時を迎えました。「今井館ニュース」第45号（二〇一九年一月三〇日）以降にその間の経過が随時記されております。

私は一九六四年に東京大学に入学、その秋から柏陰舎聖書研究会（西村秀夫、鈴木皇、杉山好先生方がご指導）、翌年から杉山先生の家庭集会に出るようになり、現在までの五十有余年を、聖書を指針として歩んできました。したがって無教会の先生方を通じて今井館に強い愛着を感じているのは言うまでもありません。しかし今井館の存在意義はそれだけにはとどまらないと思います。

それは内村鑑三、またその薫陶を受けた次の世代、そしてさらにその次の世代の方々が、近代日本の思想史、精神史、社会史に刻まれた、真つすぐで清冽な生涯を語り継ぐ場所という意義です。内村鑑三は天皇を国家の頂点とする価値観を批判しました。次の世代の一人、矢内原忠雄はアジアを植民地化して利を得ようとする国策を批判しました。そして三代目、私の師にあたる柏陰舎聖書研究会の先生方は、真理の追求から逸れつつある大学の学問研究の姿勢を批判しました。内村鑑三に始まる無教会の人々に共通するキーワードは「良心」だと私は思います。それらの先生方の社会分析における鋭い目と判断力、勇気ある発言と行動、そしてぶれることのない生涯はつねに「良心」に裏打ちされていました。必ずしも宗教としてのキリスト教にはシンパシーを感じていない広範囲の日本人にも深い感銘を与えてきたように思います。「今井館」や「内村鑑三」という固有名詞を知っている人、もつと良く知りたいと思っている人たちが、キリスト教の世界の外にも多くおられるということを、私は経験してきました。この新築の今井館が、現代社会にあって「良心的に生きる」とはどういうことか、という問題意識を持つた人々を魅きつけ、学びの一步を踏み出す場となってほしいと切に願います。

（『今井館ニュース』52号表紙より）